ボーリング柱状図

調査名	平成28年度　大畔谷川通常砂防事業に伴う業務委託
事業・工事名	

ボーリングNo.	5	2	3	3	0	1	3	0	1	3	0

シートNo.

ボーリング名	Bor No.2(No.2+16.0 L-15.2)	調査位置	広島県府中市上下町			北緯	34° 41’ 58.6000″
発注機関	広島県東部建設事務所	調査期間	平成28年11月 3日～平成28年11月 3日			東経	133° 07’ 32.1000″
調査業者名		主任技師		現場代理人		コア鑑定者		ボーリング責任者	
孔口標高	GH 434.63m	角度	180° 上 90° 下 0° 0°	方向	0°北 270°西 90°東 180°南	地盤勾配	36° 水平 0° 鉛直 90°
総掘進長	7.00m	使用機種	試錐機	東邦製D-0型	ハンマー落下用具	半自動型
			エンジン	ヤンマーF10型	ポンプ	東邦製BG-3型

標尺 m	標高 m	深度 m	柱状図	岩種区分	色調	硬軟	コア形状	割れ目の状態	風化	変質	記事	岩級区分	孔内水位／測定月日	標準貫入試験 深度 m	打撃回数／貫入量 回/cm	N値	原位置試験	室内試験	掘進状況 掘進月日	掘進速度 cm／時	孔径／孔壁保護	コアチューブ／ビット	給圧 MPa	回転数 rpm	送水圧 MPa	送水量 l／分	排水量 l／分
	434.03	0.60		砂質土	暗赤茶						細粒土を主体とし草・根を混入する。		11/3 無し														
1	432.63	2.00		礫混り砂質土	淡茶灰						細粒土～砂を主体とする。風化土および崖錐堆積層が混在する。GL-1.7mより礫の混入多くなる。			1.15	50/30											
2														1.45													
														2.15	50/22												
3														2.37													
														3.15	39/30												
4	429.83	4.80		風化凝灰角礫岩	淡茶灰	D	V	d	ε	3	岩組織を残すものの風化により土砂～礫状コアを主体とする。土砂と礫状の互層状となる。礫の表面は、ほとんど褐色に変色している。指圧、軽打にて容易に砕ける。	D		3.45													
														4.15	50/22												
														4.37													
5											外周を残すものの礫状～ブロック状コアを主体としている。全体的に褐色に変色しており亀裂も発達している。			5.15	貫入不能												
6												CL		6.00	貫入不能												
	427.63	7.00		凝灰角礫岩	暗緑灰	B	IV	b	β	2	比較的新鮮となりブロック～短柱状コアを主体とする。亀裂が発達しており、亀裂面は褐色に変色している。亀裂面角は20度を主体としそれに高角度の亀裂が入っている。	CL		7.00	貫入不能												
7																											
8																											
9																											
10																											
11																											
12																											

コア採取率 ―×― (%)　最大コア長 ―●― cm　RQD ―― [%]

＜凡例＞

コア硬軟区分判定表

記号	硬軟区分
A	極硬、ハンマーで容易に割れない。
B	硬、ハンマーで金属音。
C	中硬、ハンマーで容易に割れる。
D	軟、ハンマーでボロボロに砕ける。
E	極軟、マサ状、粘土状。

風化区分表

記号	風化の程度
α	非常に新鮮である。
β	新鮮である。層理面、劈開に沿ってわずかに変色があり割れ易い。
γ	弱風化している。層理面、劈開に沿って風化している。
δ	風化している。岩芯まで風化している。ハンマーで簡単に崩せる。
ε	強風化している。褐色化し、指先で簡単に崩すことができる。

変質区分表

記号	変質区分	変質状況
1	非変質	肉眼的に変質鉱物が認められないもの。
2	弱変質	原岩組織を完全に残し、変質程度が低いもの。または、非変質部の割合が肉眼で50%以上のもの。
3	中変質	肉眼で変質が進んでいると判断できるが原岩組織を明らかに残し、原岩判定が容易なもの。または、非変質部を残すものおよび網状変質部。
4	強変質	構成鉱物、岩片等変質鉱物で完全置換され、原岩組織を全く～ほとんど残さないもの。

コア割れ目状態判定表

記号	割れ目状態区分
a	密着している。あるいは分離しているが割れ目沿いの風化・変質は認められない。
b	割れ目沿いの風化・変質は認められるが、岩片はほとんど風化・変質していない。
c	割れ目沿いの風化・変質は認められ軟質となっている。
d	割れ目として認識できない角礫状、砂状、粘土状コア。

コア形状区分判定表

記号	模式図	コア形状
1		長さが５０ｃｍ以上の棒状コア。
2		長さが５０～１５ｃｍの棒状コア。
3		長さが１５～５ｃｍの棒状～片状コア。
4		長さが５ｃｍ以下の棒状～片状コアでかつコアの外周の一部が 認められるもの。
5		主として角礫状のもの。
6		主として砂状のもの。
7		主として粘土状のもの。
8		コアの採取が出来ないもの。スライムも含む。(記事欄に理由を書く)

備考

株式会社荒谷建設コンサルタント